

覚書

写真展

「雨包、粒子」

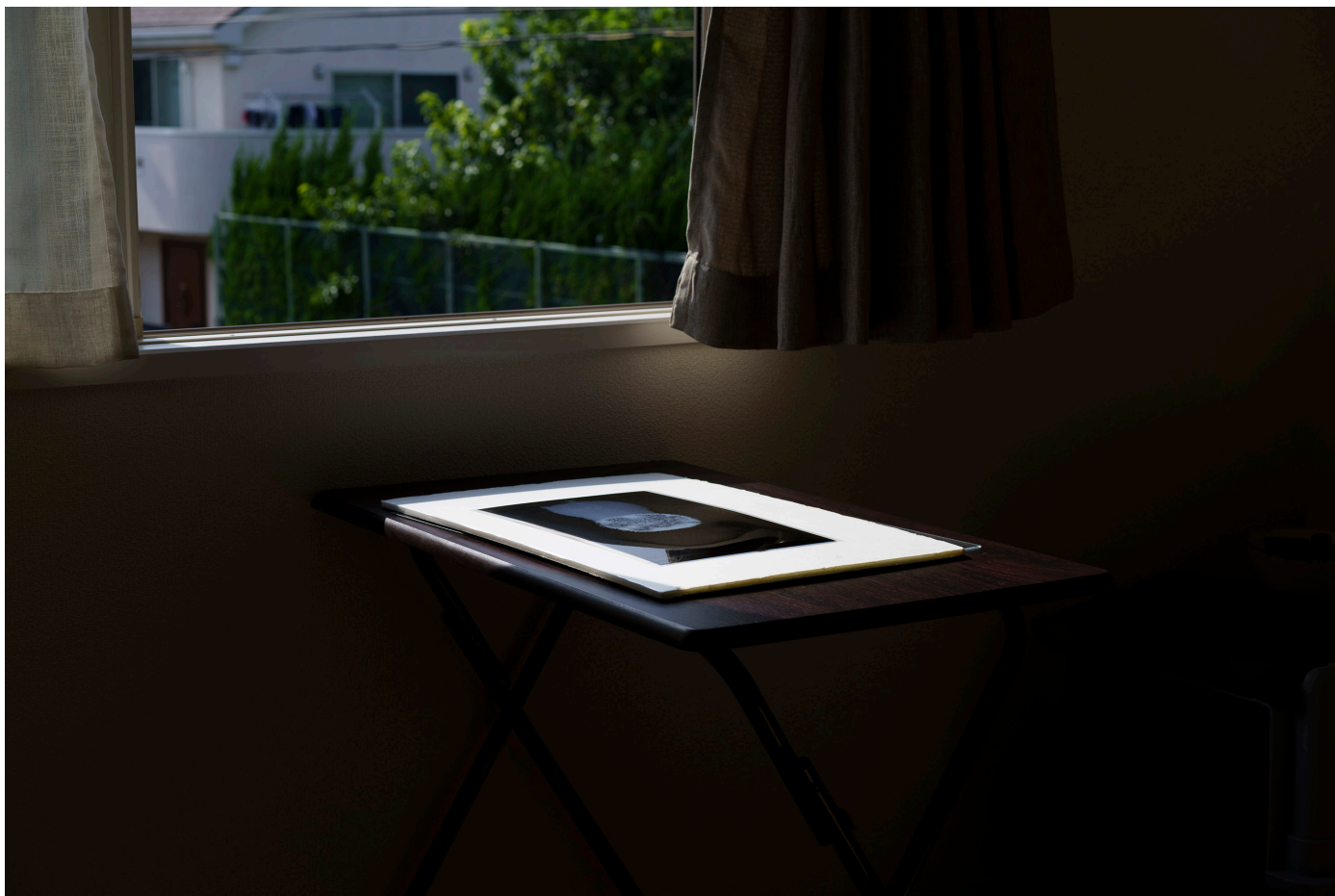
について

制作

植田優子

展示発表

仙台写真月間
2021



「雨包、粒子」という作品を組んだ。展示初日の朝、いま少し時間をゆつくりと過ごすことができるなら、何がしたいかという問いが沸き起こった。作り続けたいと思った。制作に取り組み、写真を展示し、鑑賞者との間に何が起こるのか。その時々を考えを写真とは別の形で残しても良いのではないか。資料にまとめて展示を見てくださった方に送ることに決めた。そういうことでこの文章がある。

雨包、粒子

このタイトルを私は、「ひょう、りゅうし」と読む。

電という漢字の己は、旧字体の巳と表記する。

生活のなかで写真を撮り、写真についての思索が続く。

展示作品について、この写真は私の世界を見る癖であり、自分が求めている表現とは別の物になった。その経緯をなぞっていく。

制作はまず撮ることに始まり、自分の意識が向かった方向に目指すものを定めていった。撮影に向かうのは、日の入りまでの約二時間。場所は自分の家から歩いていけるところ。展示した中で、海の写真だけは旅先で撮影した。青緑色の絵の具かクレイのような写真は海の写真だ。

写真を撮る手は目の前の現実に対応して、いまいる風景の中を進んでいく。写真は現実にある被写体と骨がらみのもので、被写体の意味から逃れることはほとんどできない。私はいつもここに壁を感じる。写真を見たときにその写真を成立させている情報を人は掴みとる。情報とは例えば、モノクロ、カラー、人、建物、自然、陰影、その兼ね合いなど。写真を成立させている情報をその人なりに解釈して写真の印象や存在理由を受け止める。言葉や意味に置き換えられることは当然行われる。こうした情報や言葉を、写真からできるだけ遠ざけることは可能だろうか。それを普段自分が撮影している生活の空間で撮ることとはできるだろうか。写真から情報を遠ざけると何が残るのか。一枚の中に実現させるような技術的な方法を見つけない。理由が先にあるって動いたというよりも撮影しながら、このような意識が強くなっていった。そういうものを作らなければいけないと思いついていった。

タイトルを考えあぐねていたある日、電が降るのに出くわした。大粒の電がバンバン音をたてて地面にぶつかる。氷の塊。夏だから、すぐに溶けて消える。こんなに印象の強いものが消えて無くなるのはいいな、と思った。電がやんだ空は空気が澄みきっていて大粒の丸い雨がパラパラ落ちてくる。電とそのあとの空気は私の頭を楽にさせた。目の前の現実が簡単に説明のつかないことをする、現実の意味を与えるのは自分だ。電はいいかもしれない。たとえば、電という漢字を冠とつくりで分ける。電は、雨包だ。

ひょう。

ひょう、だけでは音がものたりない。

りゆうし。粒子はずっと自分の頭に仮置いてある言葉。

ひょう、りゆうし。この二言は音だけ聞いても、何のことだかよくわからない。人の名前に聞こえるかもしれない。音と漢字と意味と写真に、このくらいの距離があっている。こうしてタイトルは現実から借りた。そしてすぐに、大変なタイトルにしてしまったと反省もした。私は漢字の成り立ちについて理解していないし、電という現象を科学的に説明することもできないのに、そのものの魅力を借りようというのだから。

制作を進めるなか、実際には考えること自体が難しかった。考えようと思っても頭は真っ白だった。世の中の渦のせいでもあったと思う。世の中の興味と別のことに向かっていたかった。作らない時間、無為に過ごした時間は一瞬で過ぎていくと知っている。焦るばかりにただ歩き、撮影していたのも事実だった。また、撮ることと作るこの間には大きな溝があるように思えてならなかった。作ること、表現するということは何らか工夫をすること。その工夫の技術的な方法を見出そうとしていた。でも、私が撮影する瞬間というのは非常に勝手なもので、そこに技術的な手法を組み込むようになっていかなかった。頭の中で思うことと、撮影とは一致しない。何を撮っているのかといえば、自分の世界を見る癖でしかないのではないか。撮ることは深い溝に写真を投げ込み続けるような感覚になる。今いる場所から、溝に、写真を投げ込む。望むものは、溝の向こう側にあるのか、あるいは、溝の形を変えることが工夫なのか。今日もそろそろ行く時間。日暮れのころに、解決方法を見つけないかと思いながら撮影に向かうのだった。

粒子について。2019年の春にカロタイプ制作のワークショップに参加し、展覧会で黎明期の写真を見た。カロタイプ、ダゲレオタイプなど古い時代の撮影行為は現在とかなり異なるのだが、人が撮るものってあんまり変わっていないんだと改めて思い、古典技法に興味が湧いた。2020年になって外出できない雰囲気になりつまらない気持ちと、フォトグラムをやりたい、ということとで自家制作が安易なサイアナタイプを作ってテストをした。サイアナタイプは支持体となる紙に感光剤を塗布することで印画紙を作り、日光などの紫外線で感光させる写真技法だ。私は透明フィルムにデジタル写真をプリントして、そのフィルムを印画紙の上に置き、ガラスで圧着して日光で感光させた。この作業を窓辺でやっているところを撮影したのが写真展告知パンフレットに掲載した写真だ。梅雨間の真昼、強い日差しだったはずなのに、そう見えないように

撮ることもできるのが写真の妙なところだと思う。この透明フィルムに写真をプリントするとき、間違って裏面に印刷をしてしまった。インクの粒子は定着せず像は曖昧になり、うねりが繰り返している。このミスは前にもやったことがあり、その時も気になった。この印刷物は写真ではないのだろうか。工程は同じ、定着しないだけ、一応の像はある。この像は物理的に写真ではある。この曖昧な像をまたサイアノタイプの印画紙に焼き付けてみる。でも、この不確定な像を作り続けることはできなかった。もっとよく考えて作らなければいけない。これも制作の中の形にならないことのひとつだった。

搬入の前日に仙台アーティストランプレイスに行くと、二人の写真家の個展が行われていた。どんな時にも良い仕事をしている人はいるものだと思ふが伸びる。この展示をみることでできただけでも私は恵まれていて、ここに来た甲斐があると思える。

搬入でできることは、持ってきた写真がきちんと響くように配置することしかない。改めて写真を見る。同じ場所や状況、撮影時間の連続。それらが一枚、三枚組みになっている。写真を成立させる情報を遠ざけるという考えがあったはずなのに、撮影時の関連で選んでいるのは、私がそこに意味を持ち込んでいることになる。愕然とする。セレクトする時には写真の中に、あるか、ないかで、選んでいた。なにか良いものがあり、悪いものがない、それを見極めるということ。写真は写っているものがすべてで、一枚一枚の関連は、組む人間がつける意図になる。ますます自分のやっていることの説明がつかなくなっていく。もう、この選択の先に提示できるものを完成させるしかない。

・会場に入って右の壁（タイトルのキャプションを貼った壁）から反時計回りを展示順に設定。ただし、どの場所に立って見ても良いように構成。

・写真の横の並びが、構図や色など視覚的にぎりぎり破綻しないようにしつつ、関連する写真を、撮影時の位置関係、進行方向、目の動きを再現するように配置した。

・写真の横並びに時間軸はないが、ひとつだけ、立木の奥に子供が動く写真は三枚あり、時間の経過をねじるように配置。子供が写っていない写真は一番撮影順が遅いものだが、展示の最初に持っていた。

主にこの三つを展示構成として行った。関連する写真には、撮影時の方向が構図や色として写り込んでいて、この方向を再現するように並べることで視覚的に成立するのではないか。また展示会場が細長い空間になっており鑑賞者が壁面に集中しやすい環境だったことから、部屋の角を使って写真の中の空間に広がりを持たせることができると考えた。

展示を人に見ていただいて様々な言葉を交わした。一部を書いておきたい。ここに記載できなかったご意見も、とても有り難く受け止めている。



——あれこれと考えたことと、展示に至った写真は一致しなかった。その経緯など文章をこの会場に掲示すると写真が入らなくなると思って、文章を置きませんでした。

Iさん 私も以前は、写真と言葉を一緒に置きたくないと思っていたのだけれど。でも考えが変わって、多少言葉の力を借りても、表現を前に進めたいと思うようになった。

——新しい表現方法を考えても、出てこなかった。

Nさん でも、自分の頭で思いつくことなんか、たいしたことないと思う。写真は撮っていつて見つけていく方法もある。

——ある被写体と技法で作品を貫通させるような作り方がある、それをやるうと思ったが、自分はその作り方は向いていないとわかりました。

Kさん 方法論だけで写真を撮ると、見落としてしまうものが出てくる。見落としたくないものってあるよね。

——例えば写真を成立させる一つに、美しさってある。でも美しさを量産するのが仕事じゃなくて、どのように美しくあるかを客観視したいと思いませんか？

Sさん 美しいということすら、些細なことなんだよ。色々と考えるのもわかるけど、その時に何に反応するか、その積み重ねでしかないと思うよ。

Nさん 撮る時に、何に反応しているの？

——よくよく考えてみると、世界を面白がっていたい、というのはある。写真自体が自分にとって面白いものに含まれている。写真の表現の可能性って世界が変化し続けることと並行するところでもある。目の前が面白いと思ったときにシャッターを押しているというのはある。

Yさん この写真をみて、あなたはあなたでしかないという感じがする。裏の裏がずっと続く。

——私も展示までして気がついたのですが、自分が写真から遠ざけようと思っていたことが、実際には写真に強く影響していて、無視しようと思うほど影響を受けている。コロナ禍のこともそう。自分がやりたくないことに、自分は支配されている、それに気がつき、また別のことを試そうとする。裏の裏は、そういう意味ではあっていると思います。

展示を終えて、この文章を書くことで言葉にできたことがある。

見て、静かなものを作る

世界の複雑さの中で、いつとき掴みとれる単純な一葉を提示する

単純にしか見えないものの中に、気がつかない複雑な側面を提示する

人と世界の間の、あることさえ気がついていない現象を拾いあげて提示する

それらは、光のスペクトルの幅を出ず、〇〇の範囲内で行う

そういうことで作っていて、何か一つでも確実に実現しようと、写真と向き合っているように思う。(〇〇に入る言葉は、検討を続ける)

「雨包、粒子」は、自分が作っておきながらその内容を実感することが非常に難しいものであったし、何を提示できているのか釈然としないままに展示を終えた。そういうこともある。この写真が自分にとって重要なものだということはわかっていて。おそらく何らか解決したと自分が納得できるのは、写真の中に実現できたときなので、これからも地道に制作を続けていこうと思う。

その時にまた写真を見ていただけたら幸いです。























